

明中期吳中文苑考

——名士育成を通して——

澤 田 雅 弘

はじめに

吳中が明初の壓政より立ち直ると、その文苑は一氣に活氣を帯びた。特に沈周より文徵明にいたる時期——成化・弘治・正徳・嘉靖のおよそ百年——は、その最盛期であり、多様な知名文人を輩出しつつ、無類の盛況をみせた。⁽¹⁾その盛況の様子や、かれらの詩書畫三絶の文人藝術、また個々の生涯などについては、國內外ともに多くの論考がある。⁽²⁾しかし、かれらの文人社會が大局的に見てどのような性格や構造をもつものか、また士大夫文人の脱政治化そして在野文人の文藝家としての自立という史的展開の中で、かれらはどのような位置を占めるものか、という文學史的側面については、まだほとんど究明されていない。

明中期の他郡には、定員制や社約による規制や素質の適性判断による選抜などを行って成員と非成員との間に一線を劃するような詩文結社が見られるにもかかわらず、吳中にはそのような活動が育たなかった。⁽³⁾また、文學追求の意志堅強な者からは、吳中の文學は靡弱と批判されざるをえないものであったにもかかわらず、⁽⁴⁾知名文人が輩出した。これらの現象は、言うまでもなくポジティブな文學追求心を蔑視

し、文學活動はあくまでも有閑者としての餘業でなければならぬとした文人精神の反映であることに違はない。しかし、この理解だけでは、上記のような現象がなぜに吳中に最も顯著に認められるのか、という問題に十分な解答はえられない。かりに文人精神の問題から考えようとするとしろ、吳中にそれほど文人精神を高揚もしくは普遍化させたものは何か、あるいは、餘業として文學に従事するものが文人であるという標識を維持させたものは何か、という掘り下げた考察が必要になる。明代吳中文人を生んだ時代性、あるいは地域性の究明は、近世文人の文學藝術を考える上でも重要であると考える。

稿者は以前に、この文苑を形成する基本的なものは何かについて考察したことがある。⁽⁵⁾本論文ではその際少し觸れた先達の獎譽現象を明らかにすることによって、多様な知名文人の輩出を可能にした原因は何かを考え、この文苑社會を理解する一助にしたいと思う。

一 吳中先達の獎掖・延譽

明中期吳中士人に關する記事を諸文獻より抽出する作業を進めていくと、先達が後進を率先して獎掖する姿勢が明確に浮び上ってくる。

獎掖あるいは延譽の具體例は隨時述べることにして、まず獎掖の姿勢

について記された對照的な二例を擧げてみよう。一は氣節峻嚴な官僚李應禎、一は溫厚な布衣沈周のそれである。二人はまた文徵明が平生師事敬慕した三人中の二人でもある。

李應禎：上交必嚴辨其人、而下交卑賤、不求備才與行。未顯爲延譽、獎掖不少後、然接見甚嚴。嘗曰、前輩自有規度。若自降以崇虛讓、豈所以教後學邪。〔吳郡文粹續集〕卷四三所收、文林「李應禎墓誌銘」

沈周：與人處、曾無乖忤。而中實介辨、不可犯。然喜獎掖後進、寸才片善、苟有以當其意、必爲延譽於人、不藏。〔文徵明「甫田集」〕卷二五「沈先生行狀」

二人の延譽に對する姿勢は對照的であるが、獎掖そのものに對しては、二人とも不備な後進に對しても惜しまず行つた、と右の文に記されているのである。この姿勢が墓誌銘・行狀記類の記載對象となつてゐることからみて、當時の吳中文苑では、先達は後進をそのように獎掖するのが望ましいと理解されてゐたものとみられる。

この理念のもとに獎掖された後進の例を唐寅にみてみよう。放蕩無頼の才子であつた唐寅を力を盡して獎譽したのは、友人文徵明の父文林であつた。文氏は累世人倫と仰がれた家であり、文林も謹嚴な人格者として知られてゐた。つまり二人はまったく相反する性質と處世態度の持ち主であつたわけである。文林の唐寅に對する獎掖・延譽の程は次の唐寅の言葉に詳しく知られる。

一聞寅縱失、輒痛切督訓、不爲少假。寅故戒栗強恕。日請益隅坐、幸得遠不齒之流。然後先生復贊拔譽揚、畧不置口。先后于邦閭耆老于有司無不極至、若引跛齧策駕驟然。是先生于後進也、盡心焉耳矣。〔唐寅「唐伯虎集」〕卷下「送文溫州序」

先大僕（文林）愛寅之俊雅、謂必有成、每每良燕、必呼共之。

（唐寅「唐虎外篇續刻」卷十「又與文徵仲書」）

ここで注目されることは、吳中先達の獎掖行爲が己の性向と相違する者で、性行に缺陷がある者に對してもなされた點である。つまり、このような獎譽は先の李應禎の「不交卑賤、不求備才與行、」や沈周の「與人處、曾無乖忤、」というような寛大な度量や協調融和の精神があるからこそ行いうるものであつた點である。

しかしながら、吳中先達のこのような獎掖・延譽の姿勢は吳中固有のものであつたのではなく、各地の士人に散見する。例えば、明初江西省泰和の楊子奇の場合は次のようである。

居官好獎掖士類、有片善、必延譽之、未嘗揚己抑人。〔國朝獻徵錄〕卷二所收、陳實「東里先生小傳」

しかも、甚しい場合には面識のない者に對しても一詩一文で獎掖・延譽を行つた。楊子奇の一善あれば己を屈して獎譽する姿勢は、小傳に續けていう次の一文からも理解できる。

士有得一職來見者、必勉以守身愛民。有議法刻薄、必嫉之。遇事是非、不以私蔽。

すなわち、民を愛し私斷によらず公平に對處すべしといつかれの政治理念よりすれば、かれの獎譽の姿勢は當然のところであるといえる。また、浙江省金華の宋濂は溫和でかつ小善をもって延譽をなす人柄であつたことから、士人には「大寒之加重裘、盛暑之濯清風。」のような存在であつたと記される。降つて中期福建省泉州の李源は次のようであり、

尤不自標、特謙沖下接、好獎誘人材、汲引後進、如恐不及。後生一行之善一語之工、寵借喜樂、患人人不聞。〔王慎中「王遵巖先生集」〕卷一八「李人行狀」

卷一八「李人行狀」

周暉の傳える何龍厓は、

龍厓何公、極寡交遊、却好獎掖。後進如濮州之馮祿・冀州之李再命、皆于垂髫之年而識之。爲之延師訓教、買田供給、且逢人說項斯也。卒之皆成名士。李與子公露、進士同榜。馮聞龍厓夫人死、偕妻南來斬衰、哭于墓下。其感遇之恩也深矣。(周暉『金陵瑣事』卷四獎掖)

の通りである。

以上の數例をもつてしても、上記のような獎掖・延譽が吳中固有のものではないことが判明する。では、それはまったく吳中の特性を持たないのかというと、そうではない。その點を次に見てみよう。

二 吳中文苑における獎掖・延譽の特性

吳の近傍に住む者の論評によれば、吳中では獎掖・延譽の行爲は先達の個人的行爲であるに止まらず、後進との相互關係の上に一種の統一體におけるモラルのように、先達の誰も行行爲であったというのである。そして、先達と後進ならびに同輩間における相互關係の維持により、文苑秩序や文壇勢力が維持され、文學藝術を他郡より優位ならしめたというのである。すなわち、吳中土人とは縁が深く、一時蘇州に寓居し文徵明一族と親交をなした何良俊が、郷里松江と比較して、次のようにいう。

吾松江與蘇州接壤、其人才亦不大相遠、但蘇州土風、大率前輩喜汲引後進、而後輩亦皆推重先達。有一善則褒崇贊述、無不備至。故其文獻足徵。吾松則絕無此風、前賢美事、皆湮沒不傳。余蓋傷之焉。

(何良俊『四友齋叢說』卷一六史)

また、崑山の歸有光も、吳中の張獻翼が収集した文徵明の書卷に題し

て、

太史(文徵明)尊宿、幼于(張獻翼)年輩遠不相及、而往往復動懇如素交。吳中自來先後相接引如此。故文學淵源有承傳、非他郡之所能及也。(歸有光『震川先生集』卷五「題張幼于真文太史卷」)

という。文學をして他郡より優位ならしめ、先達の美事を隈無く傳ふる程に、中期吳中文苑は士人相互の關係によるうるわしい統一を見せたいわけである。嘉興の李日華も中期吳中文藝の象徴である吳派繪畫の優位について次のように記している。

嘗聞石田(沈周)有賢父叔爲開先、衡山(文徵明)多佳子弟作嗣武。而一時勝流如唐子畏(寅)・陳道復(淳)・陸包山(治)・朱清溪(朗)・錢啓室(穀)諸人、雲湧泉興、爭奇競爽。往往合爲烟林、對圖松石、遇會心之製、相與色飛發、應手之規、無難面授。是以洪濤湊壑、微瀾濺人、千古一時、遂令莫繼。(李日華『恬敬堂集』卷三六「書徐弘澤別有社後」)

吳中先達の獎譽姿勢にみたと同様の協調融和によるうるわしい世代全體の様子が窺えよう。かれらは素質の差異を越え、互いに一才一善を評價しあって平和共存の社會を築き、これによって名士を育成したのみならず、吳中の文學藝術をも進展させた。少なくとも近傍の何良俊・歸有光・李日華たちは、そのように吳中文苑を理解していたのである。

このような平和共存の姿勢を同輩間に見てみよう。性質の相反する錢同愛と文徵明との仲は、文徵明のいうところによると、次のようである。

吾友錢君孔周(同愛)、以高明踔絕之才、負較轡奮迅之氣、感嘆激昂、以豪俊自命、雅性闊達、不任檢押。……視余拘檢齷齪、若所

不屑、而意獨親。(文徵明『甫田集』卷三三「錢同愛墓誌銘」)

錢同愛が自己と異質な文徵明に對してみせたという平和共存の姿勢は、第三者である何良俊が、

(錢)同愛每飲必用伎、衡山(文徵明)平生不見伎女。二公若燕猶不同器、然相與一世、終不失歡。(何良俊『四友齋叢說』卷二六詩)

と證言するところでもある。

自余所親、未嘗失色於人。及其週一善觀一才、若饑渴之於飲食、不厭不止。故年殆強仕、而海內勝流、什五齒交矣。(王龍『王雅宜山人集』附、顧麟「王履吉集序」)

とは、王龍の交際における姿勢を傳えるものであるが、ここにいる「及其週一善觀一才、若饑渴之於飲食、不厭不止。」という姿勢は、沈周の後進に對する獎譽の「寸才片善、苟有以當其意、必爲延譽於人、不藏。」という姿勢や何良俊が論評した後進の先達に對する稱揚の「有一善則褒崇贊述、無不備至。」という姿勢と同じである。また、王龍が「未嘗失色於人」であったというのも、沈周の「與人處、曾無乖忤。」や錢同愛の「視余拘檢齷齪、若所不屑、而意獨親。」と同じである。すなわち、己の性質に異なる者の一才一善をも積極的に評價する姿勢は、人と協和するという姿勢と不可分であるといえよう。このことは、先述の江西省の楊子奇の場合にも當てはまる。つまり、先達が後進を一才一善で獎掖・延譽し、後進が先達を同様に稱揚する相互關係が、吳中文苑に普遍していることは、吳中士人が一般に何處の士人よりも平和共存に心掛けていたことを意味しよう。

しかしながら、中期吳中文苑の性格は基本的に、吳中を本籍とする士人たちの表層社會であり、非成員を無視し不適格な成員を除籍する

ことも可能なほど人爲的に組織化された結社ではない。したがって、以上見たようなうろわしい相互關係が現實にどの程度に維持されていたかは疑問である。事實、生來物議を醸しがちな放蕩無頼の者は、一才一善により獎譽する先達を得ても、一部では非難嘲笑されざるをえなかった。例えば、唐寅の親友である張靈は、祝允明に才能を愛されて門生となったが、偏屈な性格により禮教を護持する士人からは嘲笑されて郷黨から禮遇されなかった⁽⁸⁾。また、放蕩の唐寅にも有名な科舉試験問題漏洩事件にもなる友人との不和があり、その相手は唐寅の名聲に嫉妬した都穆であるとの説が行なわれた⁽⁹⁾。唐寅は次の書簡を文徵明に送っている。

猶幸藉朋友之資、鄉曲之譽。公卿吹噓、援枯就生、起骨加肉、猥以微名、冒東南多士之上。方斯時也、薦紳交游、舉手相慶、將謂僕濫文筆之縱橫、執談論之戶轍、岐舌而贊、并口而稱。墻高基下、遂爲禍的、側目在旁、而僕不知、從容晏笑、已在虎口。(唐寅『唐伯虎集』卷上「與文徵明」)

この他、中期吳中士人間には、『姑蘇志』修述をめぐる王鏊と楊循吉との不和や、文徵明に獎譽された周天球・王禪登兩人の深い仇敵關係をなすにいたった事件などが傳えられている。周知のように、正しかつた成化・弘治間の土風は正徳・嘉靖間に矯激に向い、萬曆には名利を追い勝敗を競う傾向が激化した。この趨勢に照らせば、中期吳中文苑の現實も名利心や嫉妬心と無縁の社會ではありえなかったことが推察されよう。

類有小過、時見排抵、人有薄技、亦往往歎譽焉。述造勤工、常矯諸友曰、君等竝持歎說。而壁(文徵明)獨操翰自苦。嘗之、驟驪泛駕、蹇牛負軛。誠不可共語也。(徐禎卿『新倩籍』「文壁」)

とは、取纏め役の苦勞を背負う文徵明の人格を賞賛するものであるが、裏返せば吳中文苑の深層部では、何良俊・歸有光らが稱えたような相互關係が必ずしも圓滑には進められがたかったことを物語るう。

しかし、ともかくこのような矛盾を内藏してはいても、近傍者の贊美羨望の文章が明示しているように、吳中文苑は他郡に比べてたいへん和やかな姿を呈していたのであり、吳中文人自身もこの點を才能に代わるものとして自負していたのである。

三 文人相互關係の一性格

一般にまだ名利を得ない士人が自己の將來を開拓するために、獎掖・延譽を期待できそうな官僚や權勢家あるいは名望家の下に雲集したてであることは想像するに難くない。その様子を遡って元末の楊維禎・倪瓚・顧瑛についてみると次のようである。

楊廉夫（維禎）來禾中、撰吳越兩山亭志、併選詞人題詠、已就稿矣。夜半聞剝啄聲、起視之、則皆江南之能詩者。約數百人。各執金緡、乞楊留選其詩。（『光緒嘉興府志』卷八七叢談引、元・姚桐壽『樂郊私語』）

（余嘗怪）勝朝之季、江左、若倪瓚・顧瑛輩、不獨以豪舉其才藝、藻翰往往能蓄諸名士、而撮其勝長、諸名士亦爭願爲之客、而不自引避。（王世貞『弇州山人續稿』卷四一「卓光祿詩選序」）

明の宣德五年に蘇州府知府に任ぜられた沈鍾や、中期の政界文界の大御所である李東陽についてみて、

沈鍾在蘇州、與學禮士、儒生貧寒者、多有所給。于是爭獻詩、鄒亮獻二十首。鍾獨稱賞、欲薦其材于朝會。（劉昌『縣笥瑣探』）

李西涯（東陽）當國時、其門生滿朝。西涯又喜延納獎掖。故門生或朝罷或散衙後、即群集其家、講藝談文、通日徹夜。率歲中以爲常。……蓋公於弘治・正德之閒、爲一時宗匠、陶鑄天下之士。亦豈偶然哉。（何良俊『四友齋叢說』卷二六詩）

の通りである。これらに明らかな士人の名利欲に係る行動は明末になるとともにいよいよ激化の道を辿り、ついに名教より乖離し、一藝をもって名士や商人を物色するという蠅の糞に聚まるがごとき狀況をなすにいたった。

この士人の動向よりすると、中期吳中文苑がいかにか他郡と異なる獎譽と稱揚とのうるわしい相互關係を維持していようと、それをただちに全面的にかれらの風雅心に根ざす現象であるとはなしたがたい。端的にいえば、先達の獎掖・延譽はそれ自體後進の名利獲得に、後進の稱揚もそれ自體先達の名譽擴張に、それぞれ助力する行爲に他ならぬ。そうであるにもかかわらず、獎譽が文雅に結びつくのは、私心を抑え己を屈して和氣を保つからである。そこで以下は、吳中文人の文學活動を一面的に風雅心に歸して理解することを避け、在野活動である限り必須の生活基盤の確保の問題に沿って、かれらの相互關係を考察することにする。

文林の獎掖・延譽を受けた唐寅は、その恩に感じ、文林が温州へ赴任するのを送るにあたって次のようにいう。

不先有所引擢、後有所推戴輔翼、其何能自致於青雲之上。傳言曰、朋友不信、不獲乎上矣。此後輩之所以必仰賴也。而爲前輩者、道有所論授、相與優息、而無獨知無徒之嘆。而後輩則高山在瞻、有所標的。是上下相成也。今之後輩、被服皎麗、伸眉高論、旁視無忌、不復識前輩之尊與益也。（唐寅『唐伯虎集』卷下「送文溫州序」）

すなわち、唐寅は先達の存在を後進が目的を達する上で不可欠なものとして強く意識していることがわかる。また唐寅は別のところで、知己の推薦の意義を次のように論じている。

嗟乎、士爲貧而仕、仕又不能免于貧、斯烏在其爲仕也。士頼故人知己之推薦而後達、舉之而又不達、斯烏在其有故人知己也。士不仕。仕又無故人知己者爲之薦達、則其貧而老也固宜。(唐寅『唐伯虎外編續刻』卷十「送陶大癡分教撫州序」)

すなわち、唐寅は先達の奨掖・延譽や知己の推薦などを名利獲得の手段としても強く意識していたものと考えられよう。

中期吳中文苑に多く見い出せる先達の奨掖・延譽の具體例を、一部次に列挙してみよう。

(a) 徐有貞の吳寛に對する場合

吳文定(寛)未遇時、受知於徐武功(有貞)。有人來乞墓誌、…公曰、若是則吳寛秀才、其文足傳世者。盍往求之。(焦竑『玉堂叢語』卷七)

(b) 王鏊の陸燾に對する場合

公之歸田也、闔門自重、不妄交與。惟進一時名士與談文史。給事貞山陸公(燾)、方爲諸生、折行與交、至讀書相質、難處輒注聞之子餘(陸燾)文學云。故於時人士彬彬、多所興起。(文震孟『姑蘇名賢小記』卷上「王鏊」)

(c) 楊循吉・祝允明の文徵明に對する場合

……尤好爲古文詞。時南峯楊公循吉・枝山祝公允明、俱以古文鳴。然年俱長公十餘歲、公與之上下其議論。二公雖性行不同、亦皆折輩行與交、深相契合。或有問先君(文徵明)於祝君者、君曰、文君乃眞秀才也。公名既起、……(文徵明『甫田集』附文嘉「先君行畧」)

(d) 文徵明の周天球に對する場合

文待詔(徵明)好獎許後進。晚年人有乞書者、輒云、吾老且倦、即書亦不佳。盍往周公瑕(天球)。公瑕書不減吾、而神情正旺。于君何如。有乞畫者、輒又云、當吾世而有錢叔寶(穀)、安用我爲。人謂二公之名、起于待詔。(張大復『梅花草堂筆談』卷一「智晝」)

(e) 王禪登の錢希言に對する場合

少遇家難、辟地之吳門。博覽好學。刻意爲聲詩。王百穀(禪登)見其詩曰、後來第一流也。力爲延譽。遂有聲諸公間。(錢謙益『列朝詩集小傳』丁集下「錢希言」)

これらによれば、中期吳中の後進もしくは吳中に流寓した者たちは、吳中先達の奨掖・延譽を様々な形で受けることで名聲を獲得していたことがわかる。

王世貞は『藝苑卮言』卷八に明代文章家の名聲を七類型あげて論評している。その七類型は次の通りである。

- (1) 高貴な社會的身分により有名となる者
 - (2) 科第により有名となる者
 - (3) 他技(例えば書畫)により有名となる者
 - (4) 時代の好尚に一致することにより有名となる者
 - (5) 先達の獎譽の力により有名となる者
 - (6) 大言を發し門戸を樹てて有名となる者
 - (7) 友人と標榜しあい有名となる者
- 中期吳中における先達の奨掖・延譽もしくは同輩との相互關係は、王世貞のいうこの類型の(5)(7)の典型に他ならないのである。事實、(d)に掲げた文徵明の獎譽の姿勢は「類有小過、時見排抵、人有薄技、亦往往歎譽焉。」(前出)というもので、吳中先達の典型的な獎譽に同じで

あり、その效力は、

文待詔方負重名、吳人士多因之起譽。(皇甫沄『皇甫司勳集』卷五

「王毅詳墓表」)

と評されたのである。

このような吳中に對して、松江の先達はどうかであったかというところ、松江の士風は蘇州と大いに異なるとして嘆いた何良俊によれば、次のようであった。

蓋吾松士大夫、一中進士之後、則於平日同堂之友、謝去恐不速。

里中雖有談文論道之士、非唯厭見其面、亦且惡聞其名。而日逐奔走於門下者、皆言利之徒也。或某處有莊田一所、歲可取利若干、或某人借銀幾百兩、歲可生息若干、或某人爲某事求一覆庇、此無礙於法者、而可以坐收銀若干、則欣欣喜見於面、而待之唯恐不謹。(何良

俊『四友齋叢說』卷三四正俗)

これによれば、松江士人は榮達すると、それまでの友人との交流を一切断ち、里中の「談文論道の士」と顔を合わすのも厭い、ただうまい營利の話を持ち込む者にだけよるこんで應接するのである。また、何良俊は、

吾松士大夫家燕會、皆不令子姪與坐。恐亦未是。(同前卷三四正俗)

といい、吳中人では顧璘・文徵明・皇甫沄を例にとり、かれらは必ず子弟を桌邊に居らせ談話に参加させていると述べ、兒子が「若與我輩飲、則觀靡漸染、未必無益、不愈於群小輩誼鬪酒耶。」と結んでいる。これらには退敗した士風に對する何良俊の批判が含まれているから、幾分内容を差し引いて考えなくてはならないであろう。しかし、松江の士人がいかに吳中とは對照的に後進の獎譽に無關心であったか、換言すれば、松江の後進がいかに先達の獎譽に恵まれていなかったか、

たかが窺えよう。この點を明白にいうのは次の一文である。

儀眞一友人朱荆溪、名永年。以歲貢官至知縣。有文亦能詩。聞儀眞讀書後輩皆從之講藝、有遊覽必相隨以行。故近來眞揚之閒、人才亦彬彬可稱。吾松絕無此風。故雖科第輩出、然恐盡今之世、欲成就一箇名人、終不可得也。(同前卷三五正俗)

すなわち、何良俊は揚州における先達と後進との親密な姿を、文雅として稱贊する以前に、名士を育成する機能をもつものとして強く意識しているのである。

先述したように、唐寅は先達の獎掖・延譽を後進の尊賞との相互關係の上でとらえ、互いに目的を達成するための利害關係として認識していた。また何良俊も先達の獎譽を後進の稱揚との相互關係においてとらえ、そうであるからこそ先達の美事は限なく傳えられていると論じていた。つまり、中期吳中文苑に見られる先達と後進との相互關係は利害關係でもあったことが知られよう。では、なぜに吳中ではそのような相互關係の形をとりつつ、近傍者に贊美羨望されるほどにその相互關係が維持されていたのであろうか。この點を次に考察する。

四 相互關係の背景——先達の場合——

獎掖・延譽される者よりすれば、獎掖・延譽の規準は、それが寛大に過ぎてその權威が失われない限り、寛大であればあるほどよい。しかし、そのような被獎譽者たる後進の希望を受け入れるか否かの選擇は、獎譽執行者たる先達に委ねられているといつてよい。したがって、先達は執行者の立場により、純粹に文學的確信にもとづく獎譽も、また逆に文學上は不純な動機による獎譽も可能である。にもかかわらず、中期吳中文苑での獎譽は己に異なる性質の者に對しても、一才一

善があれば行われ、しかも率先して行うことをよしとされていた。さらに、奨掖・延譽にあたっては、(三)でみたように「君の希望を満たすのは私より吳寛でしょう。かれの文は後々まで傳わりますよ。なのにどうしてかれに頼まないのですか。」(a)、「周天球の書は私に負けません。しかも心情旺盛ですよ。違いましょうか。」(d)、のように後進を立て自己を屈して行った。文徵明についてこの屈己の姿勢を見ると次のようである。

待詔(文徵明)時猶老壽無恙。每伯起(張鳳翼)一造門、輒倒屣出迎、把臂促膝。盡爾汝之分、且復自歎以得伯起晚。(王世貞『弇州山人續稿』卷四五「張伯起集序」)

年十七、即以詩贊故翰林待詔文翁(徵明)。文翁世所推伏、前輩無兩。驟食而讀、謂其客陸禮部師道曰、吾與若俱不及也。趣延入酒之。(同右卷一〇九「張幼于(獻翼)生誌」)

當然のことながら、「及ばざるがごとく」する屈己の姿勢は儒家的イデオロギーにもとづく。例えば、門戸紛競時代の發端をなした前七子の筆頭である陝西省慶陽の李夢陽すら、

故擅仁收義、汲汲若不及者、君子之所以樹名。慢藏深積、孜孜若不足者、小人之所以穢身。(李夢陽『空同集』卷六二「答黃子書」)

というのである。

また、己に異なる者に對して一才一善をもって獎譽する寛柔な態度も儒家的イデオロギーにもとづくものである。このことは、例えば吳中の王鏊らが修述した『姑蘇志』風俗の條に『中庸』を引いて、

孔子謂、寬柔以教、不報無道、南方之強也。斯言盡之、終古不易。今吳民大率柔惠。或遇上慢下暴、往往容隱弗之校焉。

との一文を記していることから知られよう。

さらに、かれらが有閑者を標榜する文人である限り、奨掖・延譽の際に文才の有無、作風の適不適、詩文の藝術的價値の程度を嚴密に測らなければならぬ必要性はない。事實、何良俊が嘆いた松江士人の場合でも、吳中文人同等の文雅を具現している者は、その奨掖・延譽の姿勢も吳中先達同様なのである。

このように、己に異なる者に對しても行い、屈己の姿勢をとる奨掖・延譽が、儒家的イデオロギーや士人の標識である文雅からも説明できるものであることは容易に知られよう。しかし、明代の後進のすべてが吳中後進のように奨譽され名望を獲得していったのではない。例えば、王世貞に奨譽を受ける者は、同時に王世貞の文學に同調すること強いられた。同調しない場合は、徐渭や楊珂のように貶辭を受けざるをえなかった。錢謙益はこの點を「引同調、抑異己。」(『列朝詩集小傳』丁集中「沈明臣」)と批判するのである。

王世貞に顯著な同調者を黨派とし、そうでない者を非難する門戶意識は、すでに李夢陽から發していた。また、松江とは隣接地であるにもかかわらず、吳中先達の奨掖・延譽が上述のようであったからには、吳中なりの何らかの積極的な理由がなければならぬ。

その一つは言うまでもなく、風雅人としての高いプライドであろう。しかし、明の吳中士人に高いプライドを護持させ、吳中の風雅を支えてきたものがあるはずである。吳地方における文化の傳統や溫暖で風光明媚な風土もその重要な一因であるが、この文苑が在郷士人による地方文壇である點もその一つに數えられよう。明では洪武年間から府州縣學の生員にだけ科擧受験資格が附與され、また監生も生員から選出されることになった。その上、生員の資格は事實上終身のものとなり、徭役優免の特權が保證された。そこで次第に生員を嚮望する

者が増加し、歳貢や郷試の競争率は高くなり、特權を求めただけの生員が増えた。一方、監生數も景泰年間から例監制が採られたことから激増し、自然に出仕の道が狭められた。そこで監生も入監後に郷里に待機する者が多くなった。およそ應試や出仕の意志の有無にかかわらず、士人は郷里に歸屬したのである。中期吳中文苑の構成員は、この状況を背景にし、在郷する生員・監生と、原來應試・出仕の意志を持たない布衣、さらに家居もしくは退官した郷臣であった。しかも、吳中の生員・監生の場合には出仕しても郷里を根據地とした愛郷家であった。このような郷里に歸屬心の強い者の郷里での活動は、家族や家産の安定存續を願う限り、郷村社會の要求にかなうような活動をしなければならぬ。この點で任地先や流寓先の活動とは性格を別にする。

一般に在郷士人は、救濟福祉や道路橋梁の補修などの公益活動に積極的であった。作文の潤筆料を帳簿に書き止めていたとして、後世「直以爲利」(清・顧炎武『日知錄』卷一九「作文潤筆」)と批判された唐寅ですら、「家起屠賈、輕財好施。今之富人能如此慷慨乎。」(清・龔煒『巢林筆記』卷五「唐寅眞身」)と傳えられたほどである。一方、これら公益活動をなすとともに、かれらが在郷士人はつねに温厚でなければならなかった。何良俊は張悅・張鏐の松江における住まいぶりの違いとその結果とを次のように傳えている。

張莊簡(悅)致仕家居、端重嚴毅、與親識小恩、雖宗族亦不肯假借豪髮。(張)莊鏐(鏐)官至兵部尚書、以太子少保致仕居家。坦蕩和易、不設城府。親友皆蒙其惠。莊簡今子孫單弱、亦無顯者。獨莊鏐子姓繁衍。一女一孫皆至一品夫人、一曾孫登進士、曾玄孫已四十餘、在國學庠序者幾十人。郡中稱爲名族。則知莊簡雖持身嚴正、但全一己、終鮮及物之仁。莊鏐在刑部時、其所奏行新例數十條、至今用

之。則知仁恕所及、其所活者衆矣。(何良俊『四友齋叢說』卷十六史)松江の張鏐に相當するのは、吳中では文徵明の文氏であろう。文氏は「百年の家なし」といわれた當時において、無類の繁榮をみせ、文苑に累代君臨したのである。そこで文氏について在郷士人の住まいぶりを考えてみよう。

文徵明の父である文林は、温厚な徵明を利發な兄奎と比較し、徵明の方の大成を豫測した(『姑蘇名賢後記』所收黃佐「文徵明墓誌銘」)。また、唐寅の郷試合格、徵明の不合格の結果が出た時點において、文林は輕浮な唐寅よりも徵明の方が大成すると慰めた(『甫田集』附文嘉「先君行畧」)。この二件における文林の判断を支える理由は何であろう。

唐寅の放蕩無頼な性格はよく知られている。奎の性格については、徵明が次のように傳えている。「正義感が強く、親しい者でも氣にそわないところがあると容赦なく非難した。根に持つことのない性格を理解した者は楽しんで交際したが、最後まで理解しなかった者の多いことにはかなわない。」と。徵明の次男嘉によれば、「奎はしばしば危難に直面したが、徵明の必死の保護により難を逃れた。」ともある。

一方、大成を豫測された徵明の方をみると、かれがその孫の元發に對してとった行動は奎と對照的である。才氣ばしつた子であった元發がある時名士達の議論に口をはさみ、一座を傾聽させたところ、徵明は目で戒めた、というのである。元發の性格は元發自ら語るところによると、「孤高で協調心に缺け、人の過ちを許しておけなかった。」という。徵明が元發に對してとった行動と、文林が奎や唐寅よりも徵明の方が將來大成するとした判断の根拠は、人との協調性の有無にあることが知られよう。そして、この點は沈周の「與人處、曾無乖忤。」や王龍の「未嘗失色於人。」(ともに前出)という處世に等しく、また

すでに述べたように、獎譽や交際の姿勢に連なるところともなっていたのである。横放な性質で名教より乖離したと後世非難された祝允明でさえ、

喜疑掖後進、終身不言人過。(陸燾『陸子餘集』卷三「祝允明墓誌銘」
といわれるのであり、祝允明自身も、

子覺今之人、大抵意剗刻、而恥善惡。若良玉(都瑒)、退然如不能言、以是處世、宜招侮矣。而且以此得既安其躬、亦以裕後、當益隆起。(祝允明『祝氏文集』卷二「都良玉傳」)

というのである。このような處世觀が一般的なものであったことは各種の記事からも知られる。例えば、明末のことにはなるが、吳中の布衣史兆斗の性格とその結果を傳えて、

爲人剛直。見少年浮薄者、數叱斥之。雖其人內媿面發赤、弗顧也。以此爲士大夫所重、亦以取嫉於人。(清・汪琬『堯峯文鈔』卷三四「史兆斗傳」)

ということからも察せられる。士人であることと庶民と共存する在郷者であることとはさまに保身をうることの困難さは、次の一文により象徴的である。

士大夫勵名節、畏清議、落落難合。迨其合也、不爲利移、不因熱熱、時有惴惴焉。惟恐不爲君子而蹈于小人之一心。……但一爲正人君子所擯、則終身不齒于士林、當事亦從而薄之。(清・葉夢珠『閩世編』卷四「士風」)

それゆえに郷里に定居する士人は氣節を護持しようとしつつも、救済福祉を行って徳を示し、温厚であることをもって美事としたのである。羅景綸が正徳頃の唐寅・王寵・袁泰らの吳中文苑を自慢したのを、文元發が補説して、「乏才の誚は免れないしろ、才能だけの世

界ではない。」といったが、その自負は才能を誇ってはならない現實があったからでもある。なぜなら文元發は別なところで、

凡人之有才者、切不可自矜。自矜者、不惟爲有識之士所鄙、卽庸下人、且亦有非笑之者。(文元發『學圃齋隨筆』54頁)

ともいうのであるから。また事實、何良俊は、

世之人、大率才大者、多關於拘檢。故楊邃庵(一清)・石齋(延和)・張羅峯(聰)物議甚多。如王晉溪(瓊)者、世遂以小人目之。然其才固不可掩也。(何良俊『四友齋叢說』卷十史)

と傳えている。

すなわち、郷村社會では、たとえ道德的確信にもとづくとも、妥協を知らない二者擇一的な言動をとったり、無類の才能であってもそれを誇るようでは、嫉視や危難や批判を蒙ることは避けがたいといえる。しかも、吳中の場合は國家權力に依存しない布衣が多數居住していた。かれらは多く師表と仰がれ、郷評の主な形成者として、また公卿をはばからない清議の徒として、吳中文化に多大な影響を與えていた。したがって、吳中の在郷士人たちはさらに私利の追求や私斷による行爲、また權力を振る活動も許されず、公の立場に立つ言動が要求された。そしてこの點が松江文化との差異の重大な原因であったとされている。つまり、吳中文苑の文人達は、郷里に定居するがゆえに、またさらにその地が清議の盛んな吳中であるがゆえに、一般に優柔に活動することが必要であったといえる。

獎譽についてみると、萬曆・天啓間の湖北省麻城の梅之煥の例ではあるが、かれは男子に恵まれなかったことで女色を漁り郷評より輕視された。しかし好んで後進を獎掖したことから同時に重んじられた、と傳えられる。すなわち、獎掖・延譽を望む者が溢れている限り、一

才一善をもつて己に異なる者に對しても積極的に行う吳中先達の獎譽は保身的手段ともなりえたといえる。しかも以上みてきたように、そのような獎譽の姿勢はそれ自體、また吳中在郷士人にとっての必須の處世態度でもあったのである。

すなわち、中期吳中文苑において文人間のうるわしい相互關係が維持されたのは、儒家的イデオロギーや文人の標識である文雅からも説明できる。しかしそれ以前に、先達にあつては、私斷によらない獎譽を行うことが、郷評から師表とされ郷里における精神的支配を獲得し、自家の保全繁榮を確實に保證させる處世でもあったからであるとしなければならぬ。

五 相互關係の背景——後進の場合——

後進にとつても自家の保全は當然のことであるが、より當面の問題は、まず自分が名士となる道また生活基盤を得るための道の開拓にあつたことは言うまでもない。したがつて、吳中後進にも吳中先達の獎掖・延譽に與かる道を選ばせた積極的な理由がなければならぬ。その最大の理由は、言うまでもなく郷里での名望を獲得しようとする點にある。そしてまた、吳中先達の獎掖・延譽が一才一善により積極的になされた點にある。しかしそれ以外にも、以下に述べる吳中なるがゆえの利點もあつたからであるといえよう。

吳中文苑の形成地盤である吳中では、根深い文化的資質と經濟的繁榮によつて、文學の素養は庶民層深く浸透していた。例えば、沈周の家では僕隸までも文墨を諳じ(錢謙益『列朝詩集小傳』乙集「沈氏二先生」、黃省曾の時代には、幼童や村農が詩賦を嗜むことが一般化していた(黃省曾『吳風錄』)。經濟的繁榮については、十五世紀後半の蘇州の活

氣を記した次の一文に知られる。

逮成化間、余凡三四年一入、則見其迥若異境、以至於今、觀美日增、閭閻輻輳、棹楔林叢、城隅濠股、亭館布列、畧無隙地。輿馬從蓋、壺觴榭盒、交馳於通衢。永巷之中、光采耀日。游山之舫、載妓之舟、魚貫於綠波。朱閣之閒、絲竹謳歌、與市聲相雜。……(『光緒蘇州府志』卷三風俗引、王鎰『寓圃雜記』)

この狀況下、名士の周邊には後進や好事家は言うに及ばず、客商までも雲集した。一例を沈周にとつてみると次のようである。

一時名人、皆折節內交。自部使者郡縣大夫皆見賓禮、縉紳東西行過吳、及後學好事者、日造其廬而請焉。相城居長洲之東偏。其別業名有竹居。每黎明門未闢、舟已塞乎其港矣。先生固喜客、至則相與燕笑咏歌、出古圖書器物、摸撫品題、酬對終日、不厭。閒以事入城、必擇地之僻陬者潛焉。好事者、已物色之、比至則屢滿其戶外矣。

先生高致絕人、而和易近物。販夫牧豎、持紙來索、不見難色。或爲賈作求題以售、亦樂然應之。數年來、近至京師、遠至閩浙川廣、無不購求其蹟以爲珍玩。風流文翰、照映一時。其亦盛矣。(王鏊『震澤集』卷一九「沈周墓誌銘」)

このように「販夫牧豎」という卑賤な者までも名士を物色する様相より考えるならば、王世貞が批判する明晚期吳中文苑の自律性のない様相が現實に近かつたものと推察されよう。王世貞は次のように批判する。

吳下諸生、則人人好褒揚其前輩燥髮所見。此等便足衣食志滿矣。亡與語漢以上者、其人與晉江(王慎中)・昆陵(唐順之)・固殊趣。

(『弇州山人四部稿』卷一七「與李子麟書」)

吾吳中盛文獻彬彬、闔閭詩書矣。然好推尊其時顯重耳。傳而共爲

其名。以故一徐(陵)・庾(信)出而語語月露。一元(稹)・白(居易)貴而人人長慶。沿好成格、沿格成俗、而不可挽也。(同右卷六八「潘潤夫家存稿序」)

この傾向が王世貞時代と程度こそ違え、明初よりそうであったことは、方孝孺の次の一文でも明らかである。

近代文士有好奇者、以誕澀之詞、飾其淺易之意、攻訐當世之文。味者群和而從之、而三吳諸郡尤甚。(方孝孺『孫志齋集』卷一四「贈鄭顯則序」)

このような文苑下層部の附和雷同は、指導者層で呈示された評價を煽揚する力となることを考えれば、もはやそれは下層部だけの問題ではなくなる。王世貞は、

吳中少年習聞其鄉有名者、則日益事相貴推竊不休、飾嫖母揚其直而售之。(『弇州山人四部稿』卷六四「俞仲蔚集序」)

ともいっている。商人が名士を物色する吳中において、このような附和雷同に煽揚されては、眞ならざる者も眞となり、不備なるものも十全となりえ、また、その力は四方より好事家や客商を呼ぶ原動力ともなりうる。しかもこれを助長するように、吳中は名勝地であり、かつ都會であったから、四方の名士の出入も頻繁である。そこで吳中の知名人は天下の知名人ともなりうるのである。清初のことではあるが、孔尚任は都會の力量を次のようにいう。

天下有五大都會、爲士大夫必遊地。曰燕臺、曰金陵、曰維揚、曰吳門、曰武林。其地之名山大川、人物遺跡、各甲于天下。而士大夫之過其地者、登臨憑弔、交其人士、莫不有杼寫贈答之言。凡其言爲其地之傳誦者、卽爲天下之所傳誦。故士大夫遊其地。非但侈情觀覽。蓋如縉紳之通籍焉。(孔尚任『湖海集』卷九「郭匡山廣陵贈言序」)

すなわち、文藝の藝術的水準がいかにであろうとも、一度以上のような吳中の條件を背景にして名聲が煽揚されれば、その者はそれ相當の生活基盤を獲得できることは自明である。天順元年に退官した周鼎の賣文についてみると、

周伯爵往來吳中、常以文自賣。平生所作、蓋千篇。開卷視之、自初至終、非堂記則墓銘耳。甚至有慶壽哀輓之作、亦縱橫其間。(楊循吉『蘇談』「柯村健文」)

とある。吳中では明のはやくから作文の需要が相當にあったものと考えられよう。先達の奨掖・延譽によつて高名を得た文徵明は、八股文と古文との并用學習のはざまに、遅々として進歩しない學力と、それにもかかわらず名聲だけが先走りすることの矛盾を、王鏊に次のように告白している。

……緣是彼此皆無成。而長老先生、或見其所作、從而稱之於人以爲能。而不知者以爲眞能也。遂相率走求其文、往往至於困塞。某不能逆其意、皆勉副之所求。皆鏡送悼挽之屬。其又下則世俗所謂別號、率多強顏不情之語。(文徵明『甫田集』卷二五「上守谿先生書」)

文徵明においては作家的悲哀をみることもできるが、まだ名聲を得ない吳中新進にとつては、以上のような吳中の條件は、先達の奨掖・延譽を受ける上に、この上ない利點といわなければならぬ。それゆえに後進にとつても吳中先達とのうるわしい相互關係が維持されるのが望ましかったといえる。

おわりに

以上、中期吳中文人に顯著に認められる先達の奨掖・延譽の現象に注目し、吳中文人集團を考えてきた。その結果次のことがいえよう。

すなわち、近傍者も證言し羨んだ先達・後進、ならびに同輩間のうるわしい相互關係の複合體は、清議の盛んな郷里吳中に定居することを前提とした士人によって築かれた國家權力によらず權勢を振わずに自活するための互助機構でもあった。それゆえに、一才一善が評價され、名士が數多く育成されたのである。

自己の性質と異なる者の一才一善をも評價する吳中先達の獎譽の現象を、かれらの文學上の價值觀においてのみとらえるならば、個性を認めるという意味において近代的な文人精神の反映、あるいは藝術至上主義とすることも可能である。しかし、郷評が權威を有する郷里吳中に定居したからであることに注意すれば、かれらのそのような獎譽は、何事においても私心を混えず公平に、しかも優柔に對應すべしとする處世觀に先ず裏づけられているとしなければならぬ。

注(1) 文徵明時代までと一應限るのは、それ以後、世をあげて門戸紛競時代に突入し、吳中文學も中心の喪失に向い、文徵明の末流も空疎なものに陥り、文氏詩とか文家詩と批判されるに至ったからである。

(2) 古くは青木正兒氏「明代蘇州の文苑」「隸家三絶」「讀畫叢談」「青木正兒全集」卷六・七所收)など有名であり、最近では内山知也氏に「唐寅の生涯と蘇州文壇」(『文藝言語研究(文藝篇)』三)以來一連の研究がある。もとより吳派文人畫についての研究は内外とも多く枚舉に遑がない。

(3) 沈周の三友會は明確な輪郭をもつが同年齡の耆英會にすぎない。文徵明らに東莊十友の稱呼があるが、北郭十友に比したにすぎず流動的である。これに對し嘉靖十四、五年山東省の海岱詩社には海嶽會集條約があり、成化開江蘇省無錫の碧山吟社は「其爲約甚嚴、十人之外、不參以俗客。……一會一詩、必命題必具稿、若爲課然者。」(邵寶「容春堂續集」卷九「跋碧山吟社詩卷」)と記される。明初福建省の閩中十子や李夢陽・王世貞ら前

後七子の活動については周知のところ。今逐一詳述する紙數を持たない。横田輝俊氏「明代文人結社の研究」(『廣島大學文學部紀要』特輯三)には全國に散在する詩社の精華が抽出されている。

(4) 王世貞「弇州山人續稿」卷四二「眞逸集序」に「今天下名能爲詩、無若吾吳。而吳詩大約有三下者。取捷鉅釘、因實成易、毋論不及。」袁宏道「瓶花齋集」卷六「叙姜・陸二公同適稿」に「大抵(隆)慶・(萬)曆以前、吳中作詩者、人各爲詩。故其病止于靡弱、而不害其爲可傳。」ほか。

(5) 拙稿「明中期吳中文苑の基本的性格」(『大東文化大學中國學論集』四)「明史列傳」卷三五「楊子奇」の條。

(7) 『國朝獻徵錄』卷二〇所收鄭楷「宋公行狀」

(8) 徐禎卿「新倩籍」「張靈」に「家本貧寒、而復挑達目恣、不脩方隅、不爲鄉黨所禮。惟祝允明嘉其才。……偃息弊廬、喟然長歎、結心鬱志、不遂所懷、然不能感激。立節君子、有所嘲焉。」

(9) 沈德符「弊帚軒剩語」卷下「唐伯虎」ほか。

(10) 陳繼儒「見聞錄」卷二に「往聞、王文恪公(鑿)修蘇志時、欲請楊公君謙、以君謙謠啄、不欲與之同局。而公亦已先辭。」「四庫提要」卷六六「姑蘇志」の條參照。

(11) 沈德符「敝帚軒剩語」卷中「王百穀」に「如其初入京試內閣索牡丹詩中一聯云、色借相公袍上紫、香分天子殿中烟。極爲袁元宰(煒)相公所賞、因成知己。同邑周幼海(天球)、長王十年。素憎王。因改袍爲膝殿爲屈、以諱之。兩人遂成深仇。」など。

(12) 註(5)の拙稿參照。

(13) 例えば范謙「雲間據目鈔」卷二に「……而聞有拾得宗子相・屠長卿涕吐、淚泊俚語、便號詩人者、抑何多也。其他字畫、災紙災扇者、不可勝道。苟爲精神物色、即自列千古名家。」また葉夢珠「閩世編」卷八「文章」に「吾松則有陳卧子子龍・夏彝仲允彝・彭燕又賓・徐國公孚遠・周鞠自立勳、皆望隆海內、名冠詞壇、公卿大夫爲之折節締交、後生一經品題、便作佳士。」

とある。この状況を背景にして、例えば文元發『學圃齋隨筆』(註22参照) 298頁に「近有一士大夫負當世之名、而世之超就之主、皆奔走焉。不知自有道者視之、政如繩之聚蠶也。」また客商を物色した蘇州士人の風を周暉『二續金陵瑣事』卷上「蠶聚一蠶」に「鳳州公(王世貞)偶云、新安賈人見蘇州文人、如蠶聚一蠶。東園(詹景鳳)曰、蘇州文人見新安賈人、亦如蠶聚一蠶。鳳州公笑而不答。」とある。

(14) 大抵世之於文章、有挾貴而名者、有挾科第而名者、有挾他技如畫畫之類而名者、有中於一時之好而名者、有依附先達假吹噓之力而名者、有務爲大言樹門戶而名者、有廣引朋輩互相標榜而名者。要之、非可久可大之道也。

(15) 例えば「與先輩文徵仲(徵明)・唐伯虎(寅)、臭味相埒、絕無松江俗態。」(范濂『雲間據目鈔』卷一「莫雲卿」とある莫是龍は『嘉慶松江府志』卷五四引郭志文苑傳に「居恆喜延獎後進、常若不及。」とある。

(16) 例えば、黃宗羲『南雷文定後集』卷一「姜山啓彭山詩稿序」に「太倉(王世貞)之執牛耳、海內無不受其牢籠。心知徐渭・楊珂之才、而欲招之。徐・楊皆不屑就。太倉遂肆其譏彈。」

(17) 『甫田集』卷三〇「文奎墓誌銘」に「平生氣義自勝、不爲貴勢詘折。雖素所押嬾、一不當其意、輒面加詆訶、至人不能堪、不爲止。然不藏怒蓄怨、或時忤人、人方以爲讞、而府君則既忘之矣。人知其易直、亦樂親附之。然卒不能勝夫不知者之衆也。」

(18) 『甫田集』附文嘉「先君行畧」に「雙湖(奎)瀕涉危難。公(文徵明)極力周護、得不罹禍。」

(19) 申時行『賜閒堂集』卷一四文元發墓誌銘に「稍長、即英英有奇。嘗耳諸名士議論、時出片語、傾其座客、待詔公(文徵明)或目攝之。」

(20) 『皇明文海』卷二三三所收「清涼居士自序」に「秉志高亢、與人寡合、不能容人過。」

(21) 註(5)の拙稿参照。

(22) 明季史料集珍影印本の頁數。

(23) 例えば陸燾『陸子餘集』卷二「仙華集後序」には「吳自昔以文學擅天下。蓋不獨名卿材大夫之迹作恒赫流著、而布衣章帶之徒篤學修詞者、亦累世未嘗之絕。」といい、中期先達の布衣を列擧して「雖其造詣或殊、然大抵博雅有文、行義修潔、出入則古衣冠。人望而起敬。」とある。

(24) 宮崎市定氏「明代蘇松地方の士大夫と民衆」(『アジア史研究』四所收)参照。

(25) 清・鈕琇『觚賸』卷五「鳴鉦薦試」に「梅長公之煥、自巡撫甘肅歸里。暮年以乏嗣漁色、頗爲鄉評所輕。然好獎掖後進、亦以此望重於時。」